

アニメにおける「戦う少年」の表象

サブカルチャーと右傾化する日本

鈴木和也

序

2011年3月11日、「東日本大震災」と呼ばれる大地震が日本を襲った。その犠牲者数は5桁に及び、戦後最大の災害として歴史にその傷跡を残しつつある。そしてあの日以来、この国は奇妙な緊張感に包まれ続けている。(宇野4頁)

『リトル・ピープルの時代』の冒頭において評論家の宇野常寛は、東日本大震災の文化的影響を以上のように述べている。私は直接この地震を経験していないが、私の祖父母は東北に住んでいたため被災した。たしかに、2011年以降、日本は「奇妙な緊張感」に包まれている気がする。特に、近年の日本の政治的な風潮に、その傾向は強い。ニュースサイトのコメント欄やインターネット掲示板では、どこか右寄りの意見を目にするが増えている。例えば、インターネットで中国についての報道のコメントなどを見ると、「対中訓練はどんどんやろう」とか「中国海洋侵略対策にはガツンとやらないと侵略をやめませんよ」など、他国とりわけ中国への強硬な意見が目立っている。(HP「ヤフーニュース」2016年5月17日)

実際、近年の日本の国際情勢は確実に変わりつつある。TPP、安保関連法案、中国や韓国、ロシアなど近隣諸国との領土問題。これらのトピックがニュースで取り上げられない日はない。では、なぜこのように日本は「奇妙な緊張感」に包まれるようになったのだろうか。

その問いに答えるべく、私はこの時代の空気といったものを、専門ゼミで学んだ表象分析を使って解析していこうと思う。表象とは英語で“representation”と言い、「あるものを別のもので表すこと」という意味である。表象分析をするときに注意すべき点は、表象するものとされるものの間に必

ず誰かの手が加わってしまうということだ。例えば、絵画なら画家の、映画なら監督の手が加わる。詳しくは本論で述べるが、それゆえに表象する側が表象する対象にどのようなイメージを持ち、それをどのように眼差しているのかを読み解くことができ、さらにはその背景にある文化や社会も分析することもできるのだ。(細谷 103 頁)

もちろん、アニメも表象のひとつの形態である。時代ごとのアニメが社会からどのような影響を受け、社会にどのような影響を与えているのか、つまりアニメと社会との相互関係について表象を通して知ることができるのだ。

例えば、1995年のアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（以降『エヴァ』）は社会現象になるほど話題になった作品だ。この作品が社会現象となるまで流行した要因のひとつとして、このアニメと当時の社会情勢との文字通りシンクロ率の高さが挙げられる。つまり、95年当時の社会が、『エヴァ』というテキストを通して表象されているのだ。このようにアニメというテキストから、当時の社会がどのように反映されているか窺い知れるのだ。

第一章では、20世紀から21世紀にかけて日本の社会情勢の変化がどのようにアニメに映し出されているかを、『エヴァ』と、2007年から始まる『エヴァンゲリオン新劇場版』（以降『新劇場版』）を比較しながら分析していく。ちなみに、『新劇場版』は『エヴァ』のリメイク作品だと一般的には思われているが、「エヴァンゲリオン」と「エヴァンゲリオン」というふうに文字にズレがあるように、それぞれは違う作品となっている。つまり、それぞれがひとつのパラレルワールドとして完結しているのだ。したがって、この2つのテキストは、いわば似て非なるものである。例えば、『エヴァ』の碇シンジは戦いを避け、自身が操縦する兵器への搭乗を拒み続ける。しかし、『新劇場版』のシンジは自らの意志で戦いに臨む。これら2つの14歳の少年の表象を通して、20世紀から21世紀にかけての世紀転換期における日本の社会情勢の変化を見ていこうと思う。

第二章では、2010年以降の社会情勢について、『進撃の巨人』（2013年）をテキストとして分析していく。この作品では主人公が敵と同等の能力を使い、敵を倒していく。これは古くからサブカルチャーでよく見られてきた設定であるといえよう。仮面ライダーは改造人間のヒーローであるし、エヴァ初号機も敵である使徒をサルベージした兵器である。

しかし、『エヴァ』を代表とする90年代のアニメと、それ以降のアニメには違いがある。それは、「敵」の定義である。『エヴァ』では敵とは何か、なぜ戦うのかについて始終懐疑的であるが、2000年以降のアニメでは、戦うことに疑問を抱かない傾向が見られる。つまり、『エヴァ』では敵と味方の区別が曖昧になっていたが、近年では敵と味方の区別がはっきりとするようになってきたのだ。

これは近年の日本含む集団的自衛権の推進の流れに見られるように、仮想敵国を想定し、その想定された敵国に対する軍備の必要性が叫ばれている現在の状況がアニメに反映されているように思われる。このような観点から、表象分析を使い、近年のアニメに顕著に見られるようになった防御の名のもとに敵に対し戦うという明確な姿勢に、現在の日本の政治・社会情勢がどのように反映されているかについて解き明かしていきたい。

以上、この論文の要旨である。最近の日本のどこか混沌としたこの雰囲気クールジャパンの代名詞であるアニメーションを通して分析し、社会とアニメの相互関係や、日本と世界との関係についても見ていきたいと思う。

第一章 『エヴァンゲリオン』における世紀末的表象

この章では、1995年にテレビ東京系列で放送された『新世紀エヴァンゲリオン』（以降『エヴァ』）と、2007年から始まった『エヴァンゲリオン新劇場版』（以降『新劇場版』）をテキストとして、20世紀から21世紀にかけて日本の社会情勢の変化がどのようにアニメに映し出されているかを分析していく。

まず、表象とは端的に言えばイメージのことである。例えば、台所洗剤のコマーシャルを取りあげてみよう。今も昔もそうしたCMで台所に立っているのは、圧倒的に女性が多い。エプロンを着た主婦が娘と一緒に皿を洗っている。こうした情景を容易に想像することができるはずだ。ここには、CMを作る製作者(たいてい男性)の「台所に立つ人=女性」というジェンダー観が反映されている。しかし、このジェンダー観はCM製作者の個人的なそれだけではなく、その背景にある社会や文化のジェンダー意識でもあるのだ。このようにして表象を分析していくと、対象に向けられる社会・文化的

なイメージを読み解くことができるのである。この表象分析を使って、『エヴァ』と『新劇場版』の二つのテキストを比較しつつ、20世紀から21世紀にかけて日本の社会情勢の変化がどのようにアニメに映し出されているかを分析していく。

はじめに、テレビ版の『エヴァ』を取り上げる。まずあらすじを述べると、西暦2000年、南極で「セカンドインパクト」と呼ばれる天変地異が起こる。それにより世界の人口は半分に減り、地球の環境は激変してしまう。それから15年後、「使徒」と呼ばれる正体不明の「敵」が突如現れ、次々に第三新東京市へと襲来する。「使徒」の襲来に対抗すべく人類は汎用人型決戦兵器「エヴァンゲリオン」を開発。エヴァには零号機、初号機、弐号機があり、それぞれのパイロットとして綾波レイ、碇シンジ、そして惣流アスカラングレーの3人の少女少女が選ばれる。シンジたちパイロットは戦うことに疑問を持ち、傷付きながらも、人類の未来を託されて使徒と戦っていく。

以上があらすじである。最初に、「セカンドインパクト」と呼ばれる出来事に何が反映されているのか考えてみる。『エヴァ』の世界では、この大惨事により世界は人口が半分になり、地軸が傾いて夏が終わらなくなるなど、終末的な風景が広がっている。これには、『エヴァ』が放送された1995年の日本の状況が深く関係している。例えば、阪神淡路大震災だ。内閣府のホームページによると、1995年1月17日に淡路島北部を震源とするマグニチュード7.2の地震が発生した。この地震による人的被害者数は50,229人に達し、家屋は約10万5,000棟が全壊し、約14万4,000棟が半壊した。(HP「内閣府 防災情報のページ」) この震災は東日本大震災が起こる2011年まで、戦後最大の災害として記憶された。

そして、もう一つ印象に残る出来事がある。地下鉄サリン事件である。地下鉄サリン事件とは、日本で初めて化学兵器が使用されたオウム真理教による無差別テロである。オウム真理教とは、松本智津夫（麻原彰晃）が1989年に設立した日本のカルト教団で、最盛期には1万人以上の信者がいたと言われている。この宗教団体が引き起こした事件として、坂本弁護士殺害事件（1989年）、松本サリン事件（1994年）、目黒区公証役場事務長の仮谷清志拉致事件（1995年）など数多くあるが、最大にして最悪の事件が、地下鉄サリン事件である。(HP「公安調査局 オウム真理教」)

1995年3月20日午前8時頃、営団地下鉄（現在の東京メトロ）丸の内線、日比谷線、千代田線の車両内でサリンが撒かれた。サリンとは、ナチスが開発した神経ガスで、呼吸筋や心機能をマヒさせて死に至らせる猛毒のガスである。オウム真理教は、この猛毒を通勤ラッシュの電車内で撒いたのである。13人が死亡、負傷者数は約6300人、被害者の中には2016年現在もPTSDや視力障害などに悩まされる人たちがいる。（HP「THE PAGE 地下鉄サリン事件とはどんな事件だったのか」）

オウム真理教には、数多くの高学歴の若者が信者として入信していた。これには、当時の頑張っても認められることのない、バブル崩壊後の「失われた10年」を生きる若者たちの苦悩の様子が見て取れると思う。このように、当時の日本は世紀末の雰囲気が蔓延していた。このように考えると、「セカンドインパクト」は地下鉄サリン事件を強く思わせ、90年代という世紀末的な雰囲気を不気味に表象していると言える。

『エヴァ』にはこのような社会的なものだけではなく、心理的なものも表象されている。それは、碇シンジというキャラクターにはっきりと表れている。『マジンガーZ』や『ガンダム』などの従来のロボット・アニメでは、父親から息子にロボットが与えられ、息子は父の期待に応じて、父を超えるべくそれに乗って戦うことになる。つまり、ロボットに乗って敵を倒すことは、オイディプス・コンプレックスを克服し、社会的に自立をすることを意味しているのだ。

しかし、『エヴァ』のシンジは、父親のゲンドウからエヴァ初号機に乗るよう指示されるが、彼は使徒との戦いに終始懐疑的である。シンジは初号機に乗ることを何度も拒んでは、周りに促されて嫌々ながら戦いに戻ることを繰り返す。物語の終盤になると、彼は初号機に乗ることを完全に拒否、生きようとするすらすら諦めてしまう。つまり、シンジはオイディプス・コンプレックスを克服せず、父親を超えようとする気もないのだ。

『ゼロ年代の想像力』において、宇野はシンジのこうした行動について次のように述べている。

シンジは引きこもり、社会的自己実現ではなく、自己像を無条件に承認してくれる存在を求めようになる。ここには、自己像の承認によるア

イデンティティの確立が明確に選択されている。そして、このシンジの社会的自己実現に拠らない承認への渴望が90年代後半の「気分」を代弁するものとして多くの消費者たちから支持を受けた。(宇野 19頁)

宇野が言うように、シンジは自己実現のための戦いを放棄しながらも、他者には(とくにゲンドウには)認めてもらいたいという欲望を持つ。このような社会的な自己実現を放棄しつつ承認を求める感性は、引きこもりやオタクのそれに似ている。それはまた、他者との関わりを忌避しながらも他者に認めてもらいたいと思うような矛盾を抱く、バブル崩壊後の若者の感性とシンクロしていると言える。なぜなら、彼(女)らは頑張っても意味が見つからない社会で生きなければならず、そのため、社会的な自己実現に失敗した若者の多くは無条件に承認欲求が満たされる場所、つまり、当時のオウム真理教などのカルト集団に依存するか、マニアックな世界で充足するオタクになるか、自立を放棄し引きこもるかの選択肢しかなかったのだ。このように、『エヴァ』のシンジにはバブル崩壊後の日本の「引きこもる若者」が表象されているのだ。

他方、『新劇場版』では若者たちのメンタリティはどのように表象されているのであろうか。『新劇場版』は2016年現在、全4部作の3作目まで公開されている。登場人物や状況設定など基本的な部分は変わらないが、第2作目の『エヴァンゲリオン新劇場版:破』が公開された2009年以降、プロットに大きな変化が見られるようになる。

そのような変化のひとつとして、シンジの他者との関わり方が挙げられる。『破』においてシンジは「引きこもり」ではなく、自らの意志で使徒との戦いを選ぶ「戦う少年」として登場するのだ。『マンガと「戦争」』において、夏目房之助はシンジのデザインについて、顎をしっかりと台形に描き、がっちり歯を噛み合わせられるような強い男として描くのではなく、顔全体のバランスをやや崩して描くことで「弱々しい歪み」を感じさせるデザインであると指摘している。(夏目 168頁)このようなルックスだけでなく、『エヴァ』のシンジは他人と必要以上にかかわることを避けながらも、他者からは認められたいという「弱々しい歪み」をもつ少年であった。

しかし、『破』のシンジは違う。まず異なる点は、彼が他者とのコミュニ

ケーションを積極的に取ることだ。シンジはレイやアスカたちを水族館に誘い、自作の弁当を振る舞うなど、以前には他人と食事をするこすら嫌がった彼からは想像もできない行動をとる。

それだけでなく、シンジは使徒に取り込まれてしまったレイを助けるために、自らの意志で初号機に乗り込み、暴走した初号機とシンクロして覚醒、使徒を「男らしく」倒す。夏目が指摘したシンジのイメージとは真逆である。シンジは「引きこもり」から「戦う少年」に変わったのだ。

このように、90年代のシンジは他人との関わりを避け、自身の内側へと引きこもろうとするが、2000年以降のシンジは外部へのコミュニケーションを求めている。では、内向的な「引きこもり」から外向的な「戦う少年」へと、なぜ彼は変化していったのか。

それは、2000年前後の社会・政治的な変化がそれに関係している。9・11アメリカ同時多発テロ、小泉内閣による格差社会の浸透などにより、人々の（特に若年層の）心理は脅かされ、宇野の言葉を借りれば、戦わなければ生き残れないという「サヴァイヴ感」ともいえる感覚が社会に広く共有されはじめた。（宇野 22 頁）つまり、外部との接触を断ち、何もしないでいつまでも受け身の姿勢でいることは、グローバリゼーションが産み出す格差社会においては敗北者となることを意味するという危機意識である。この意識の浸透により、若者は内向的から外向的に変わっていったのだ。

これには昨今の日本と諸外国との関係にもよく表れている。中国やロシアとの領土問題、韓国との歴史認識問題、北朝鮮の暴走など、現在の日本は周辺諸国との緊張状態に取り囲まれている。そのような状況下で、集団的自衛権の行使が決議され、日本と外国との関わり方が変化していくことが予想される。90年代までは何も選択せずに引きこもっていても、誰かに承認されるという考え方が主流だったが、2000年代に入ると、引きこもってはいは淘汰されるだけという危機感が高まってきたのだ。

この若者の意識の変化は、アニメにも反映されるようになる。したがって、『エヴァ』と『新劇場版』におけるシンジの表象の差異は、ここに起因することになる。「引きこもり」から「戦う少年」へと変わったシンジの表象には、若者の意識が90年代の虚無感から、2000年代の淘汰する側とされる側への二極化に対する「サヴァイヴ感」へと変化していったプロセスを辿ることが

できる。そして、若者の意識の変化には、昨今の日本と周辺諸国との政治的な関係性の変化も反映されているのだ。

次章では、このような2000年以降の日本の社会情勢を背景として、それが日本のアニメにどのように表象されているかをさらに見ていきたい。ここでは、『進撃の巨人』（2013年）をテキストとして、「仮想敵」がどのようにそこで表象されているかを分析していく。

第二章 2000年以降のアニメにおける「仮想敵」の表象

この章では、2000年以降のアニメに社会情勢がどのような影響を与え、そこにおいて「仮想敵」がどのように表象されているかを分析していきたい。序でも述べたが、近年の日本は「奇妙な緊張感」に包まれている。政治面では、2009年に政権交代をした民主党政府が終わり、2012年より安倍晋三を首相とする自民党政府が現在まで続いている。現政府の政策としてアベノミクスと呼ばれる経済対策が有名だが、2015年に可決された安全保障関連法案は戦後の安保体制の大きな変化を象徴する出来事であった。簡単にまとめると、この法によって日本は元来放棄していた集団的自衛権の行使ができるようになったのだ。今でも集団的自衛権を巡って賛否両論が戦わされているが、なぜ日本は戦後70年にわたって放棄していた集団的自衛権を復活させたのだろうか。

その背景として考えられるのが、近年の日本と周辺諸国との関係性の変化である。特に中国との尖閣諸島をめぐる領土問題は、両国の関係を急速に悪化させた。この問題が注目されるようになったのは、2010年9月7日の中国漁船による海上保安庁の巡視船への衝突事件だ。実際の衝突の映像が動画サイトに流出するなどして、社会の注目を一気に集めた。海上保安庁による『海上保安レポート』2012年版によると、この事件以降、中国の船が尖閣諸島周辺海域を徘徊する事案が多数発生している。（『海上保安レポート』67頁）例えば、2013年になると日本の防空識別圏に中国戦闘機が度々侵入するようになる。それだけでなく、2016年には中国海軍の艦船が尖閣諸島の接続水域を航海している。その結果、日本は他国からの軍事的脅威に晒されている、という意識が一気に高まることになったのだ。

韓国とも良好な関係にあるとは言い難い状況だ。韓国とは、竹島をめぐる領土問題や、慰安婦問題をはじめとする歴史認識を巡る問題などが未解決のままとなっている。それに加えて、北朝鮮との日本人拉致問題やミサイル発射問題、ロシアとの北方領土問題も解決していない。このように、現在の日本には外交上の難問が山積しているのだ。

テロリズムの台頭も、近年無視できない問題だ。2015年、イスラム国ことISによる日本人ジャーナリスト人質殺害事件が起こった。これにより、日本はテロとは無縁という安全神話は完全に崩れ去った。そして、こうした危機感も集団的自衛権の成立に影響を与えたことは否定できない。

このように、世界における日本の在り方は刻一刻と変化している。戦後70年に及ぶ安全神話は今や終ろうとし、日本は領土をめぐるいつでも敵対関係になりうる国々に囲まれ、それだけでなくテロの脅威にも晒されつつある。こうした世界情勢の変化が、今の日本に蔓延する「奇妙な緊張感」へと繋がっているのだ。

では、こうした世の中の緊張感は、日本のアニメにおいてどのように表象されているのだろうか。2013年に放送された『進撃の巨人』をテキストとして、そこに現在の社会情勢がどのように反映されているのかを見ていきたい。

この作品を選んだ理由は、メディアミックスとして成功しているからだ。アニメだけでなく、ゲーム、映画、実写映画として様々な展開をしている。こうした人気は、『エヴァ』よろしく、時代とシンクロする部分が多いことを示していると言えよう。以下、このテキストにおける「敵」の表象を分析し、それが現在の社会情勢とどのようにリンクしているのかを見ていきたい。

この作品において、「敵」として登場するのが巨人である。巨人は突如大量に出現した人類の天敵として設定されている。人類が巨人に襲われるなか、人間たちは巨大な三重の城壁を作り、その中を生活圏とすることで生き残っていく。城壁に立てこもってから100年、人々は平和な日々を送るなかで巨人の脅威を忘れてしまう。そのようなある日、壁を超えて巨人が現れ、突如として平和な日々が崩れ去ってしまう。そのとき、エレン・イェーガーという少年の家族全員が、巨人に捕食されてしまう。それ以来、エレンは復讐を誓い、巨人討伐隊に入隊する。

以上があらずじであるが、ここで二つのことに注目してみる。ひとつが、壁とその崩壊が何を表象しているかである。『進撃の巨人』では、巨人という「敵」の突然の出現により、今まで人々の生活を守っていたはずの壁が崩壊してしまう。その壁の中でヌクヌクと平和に生活していた人々の日常は、外から来た異形のものに脅かされることになる。これは現在の日本と、どのようにリンクするのだろうか。

作中、巨人は二度現れる。一度目の出現に対し、人類は壁を作ることでその脅威に対抗した。しかし、100年後の二度目の出現に対して、人々はなす術もなく逃げることにできなかった。これを日本の戦後史と照らし合わせてみよう。

1939年に勃発した第二次世界大戦に日本も参戦し、1945年に終戦を迎えた。その15年後、日本はアメリカと日米安全保障条約を締結した。以来、60年近く日本はアメリカの核の傘の文字通り傘下にいた。しかし、2000年以降、9・11同時多発テロをきっかけとするテロの台頭や、日本と諸外国との関係の悪化、グローバリゼーションが生み出す格差社会、阪神淡路大震災や東日本大震災などの未曾有の災害により、日本は奇妙な緊張感に包まれるようになった。このように日本は二度の脅威に遭っている。一度目は第二次世界大戦だ。しかし敗戦後、日本は安保条約という言うなれば「壁」に保護されることになる。ところが、近年二度目の脅威に晒されていることになる。テロや周辺諸国に象徴される「敵」の出現だ。再び外的脅威という「巨人」が現れたのである。

以上のように、戦中・戦後に日本が巡ってきた歴史が、『進撃の巨人』においては「壁」と「巨人」によって表象されているのだ。では、壁の崩壊は何を表しているのだろうか。それは安保体制という「壁」の崩壊だ。かつては有事の際、アメリカが守ってくれるという考えが定着していたが、今や安全保障も万全ではなく、自国を自ら防衛しなければならないという自衛の意識が強くなっている。その結果として、集団的自衛権の成立となったわけである。

もうひとつ注目したいのは、エレンという少年の表象である。前章でも述べたように、1990年代の『エヴァ』のシンジは敵が何者なのかかわからず、終始戦うことに後ろ向きで、最終的には戦いを放棄している。しかし、『進

撃の巨人』のエレンにとって敵は明確で、したがって戦うことに疑問を抱かず、敵である巨人を一匹残らず駆逐することに使命感を見出しているのだ。

このようなエレンの姿には、「奇妙な緊張感」に包み込まれる日本に生きる現代の若者の姿が表象されていると考えられる。要するに、集団的自衛権の決議や、仮想敵の出現、格差社会の浸透により生まれたサヴァイブ感のなかに生きている若者たちの右傾化した姿をそこに見出すことができるのだ。

さらに、このアニメは、「敵」と戦うことは自らも「敵」になるというメッセージも含んでいる。巨人討伐の最中、エレンは捕食されてしまうが、そのとき彼は突如巨人に変身する能力を覚醒させる。エレンは敵であるはずの巨人と同じ力を持っていたのだ。このように、敵と同じような力を持ち、敵と戦うという構図は以前から存在していた。たとえば、古くは『ウルトラセブン』や『仮面ライダー』、最近では『エヴァ』などだ。ウルトラセブンはモロホシ・ダンという地球人の姿を借りて、地球侵略をもくろむ宇宙人と戦う M78 星雲から来た宇宙人である。仮面ライダーはショッカーの悪の改造人間と戦う改造人間だ。エヴァンゲリオンは使徒を迎撃するために使徒から造られた汎用人型決戦兵器だ。このことから読み取れるのが、善と悪との区別の曖昧化である。

この意味で、敵と戦うことは敵になるという逆説が、武装することで「仮想敵」になりつつある現在の日本にあてはまるとは言えないだろうか。例えば、2014年に防衛装備移転三原則が閣議決定されている。これはかつての武器輸出禁止三原則に変わる新たな政府方針だ。これにより、今まで禁止されていた武器の輸出入が基本的に認められるようになった。(HP『防衛省・自衛隊』) それとあわせて、いわゆる特定機密保護法による情報統制が施行され、さらには安保法案関連法による集団的自衛権の行使も可能になった。『進撃の巨人』のように仮想敵国に日本自身も重なり、敵になりつつあるのだ。

『進撃の巨人』では中盤、今まで敵として現れていた巨人の一部は、エレンと同じように巨人化する力を持つ人間であったことが判明する。つまり、今まで敵だと思って戦っていた相手は、自身と同じ人間だったのだ。このようにして、人間/巨人、味方/敵の区別が曖昧になってくる。日本もまた、曖昧化した善/悪の二項対立のジレンマに陥るのだろうか。

以上、2000年以降のアニメにおいて「仮想敵」がどのように表象され、

そこに現代の社会的・政治的な情勢がどのように反映されているかを分析してきた。最後に、善/悪の二項対立のはざまに揺れ、サヴァイブ感に包まれる今の日本に生きる一人の若者として、自分なりの考えをまとめていきたい。

まとめ

私は、1995年の生まれだ。1987年から2004年に生まれた子どもたちは、いわゆるゆとり世代と言われている。したがって、私の世代はゆとり世代の中心に位置することになる。ゆとり教育の成果については賛否が分かれて、テニスの錦織圭や野球の大谷翔平のような破格の才能を持つスポーツ選手を生み出した世代といわれる一方、ニートや引きこもりが多い「ダメな世代」としてメディアなどで報じられることも多い気がする。実際、現在ではゆとり教育は廃止されている。結局、それは失敗だったのかもしれない。しかし、そのような私たち若者が、間もなく社会人になっていく。そんな失敗作な私たちは、どのような社会を作っていくのだろうか。

それを知るひとつの手掛かりとして、ゼミで学んだ表象分析を使って、自分たちゆとり世代がどのようなイメージで眼差されているのかを改めて考えてみようと思ってこの論文を書いてみた。

第一章では、テレビ版『エヴァンゲリオン』と『新劇場版エヴァンゲリオン』を取り上げ、これらの二つのテキストから90年代と00年代の若者のイメージの変化を分析した。これにより、近年グローバリゼーションが産み出した格差社会において、引きこもったままでは淘汰されてしまう、という危機感が若者の間に広まっていることが分かった。宇野の言葉を借りれば、「サヴァイブ感」である。シンジが「戦う少年」に変化したのは、まさにその感覚によるものであると言えよう。

第二章では、この「サヴァイブ感」をテーマとして、刻一刻と変わる日本と周辺諸国との国際情勢が、どのようにサブカルチャーに影響を与えているかを論じた。具体的には、2010年に爆発的にヒットした『進撃の巨人』をテキストとして、右傾化する日本と若者の姿がそこにどのように表象されているかを分析してみた。巨人＝「外敵」を防御する「壁」の崩壊は、戦後日本を支えていた安保体制の崩壊を表し、これにより、集団的自衛権の成立に

見られるように、自衛の意識が強くなっていく。近年、防衛装備移転三原則の閣議決定、特定機密保護法や集団的自衛権の行使が決まるなど、日本はだんだんと戦争ができる国になりつつある。武装し、情報統制をすることで、日本は仮想敵と同一になりつつある。こうした地政学的な変化が、エレンという「戦う少年」の姿に表象されているのだ。

私の生きた時代は、バブル崩壊後の失われた 20 年と言われている時代だ。私たちは好景気とは何かを知らず、気がついたら成人していた。その間に、日本より遥かに後れを取っていた国々は、経済的にも政治的にも、そして軍事的にも、着々と成長してみるみる強くなっている。そして、いつの間にか日本は仮想敵に囲まれている、このままではいつしか日本という国はなくなってしまうのではないか、という危機的な意識が私たちに芽生えてくるようになった。

実際、日本の人口は減少していて、2050 年には 1 億人を切るというニュースを聞いたことがある。そうした逆境の中、負けしか知らない私たちがサヴァイブしなければならないのだ。と思うと同時に、このように右寄りの考え方をしている私自身、サヴァイブ感あふれる格差社会に生きる若者である実感を覚えてしまうのである。

参考文献

宇野常寛。『リトル・ピープルの時代』。幻冬舎、2011 年。

宇野常寛。『ゼロ年代の想像力』。早川書房、2011 年。

夏目房乃助。『マンガと「戦争」』。講談社、1997 年。

細谷等。「はじめての表象分析—キミにもできるイメージの読み方」、『接続』9 所収。ひつじ書房、2010 年。

庵野秀明。『NEON GENESIS EVANGELION』vol.1～8(DVD)。キングレコード、2003 年。

庵野秀明。『エヴァンゲリオン新劇場版：序』(DVD)。キングレコード、2009 年。

庵野秀明。『エヴァンゲリオン新劇場版：破』(DVD)。キングレコード、2010 年。

諫山創。『進撃の巨人』vol.1～9 (DVD)。ポニーキャニオン、2013 年。

HP「ヤフーニュース」 <http://news.yahoo.co.jp/> (閲覧日 2016 年 5 月 18 日)

HP「内閣府防災情報のページ」 <http://www.bousai.go.jp/> (閲覧日 2016 年 8 月 23 日)

HP「公安調査庁」 <http://www.moj.go.jp/psia/index.html> (閲覧日 2016 年 8 月 23 日)

HP「THE PAGE」 <https://thepage.jp/> (閲覧日 2016 年 8 月 23 日)